



～カムパネルラとは～  
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol. 32 2013年1月号

- 我が家のお気に入り絵本 . . . . . 水谷 好成
- 初めての雪が降る . . . . . 藤田 博
- 絵本が教えてくれること . . . . . 千葉 明香
- 眠れないとき眠る方法を教えてくれるこの一冊 . . . . . 川口 咲絵
- 新刊紹介 . . . . . 藤田 博

### ■我が家のお気に入り絵本

水谷 好成



家族でお気に入りの絵本の話をしたら、面白い本・好きな本、とてもたくさんの本が出てきました。その中から選んだ一冊は、『スーパーペンギン・ペギントン』。ペギントンはペンギンなのに練習しても泳げず、さかなにも馬鹿にされ、ひねくれています。ある日、泳げないなら空を飛べるかもしれない、飛ぶ練習をするようになります。笑われて、ひねくれながらも練習するペギントンがとても好きです。最後に、空を飛べるようになるペギントンは子供達の人気者です。笑いの中で前向きに頑張ることと夢を与えてくれる絵本だと思います。ハードカバーにもならなかった絵本だけれど、我が家の大切な絵本の一冊です。現実の自分の代わりに何かをしてくれる、絵本のような世界があっても良いと思っています。空飛ぶペンギンを見てみたい。夢をたくさん与えてくれる多くの絵本を通して、子供と一緒に、読んでいる大人の心も変化していくと思っています。



絵本は我が家に色々なものを与えてくれましたが、サンタの絵本も外すことはできません。『さむがりやのサンタ』で、少し愛想の無さそうな太ったサンタがプレゼントを配る様子から、サンタの好物を知ることができました。ブランデーやビールが好き、ケーキやジュース・お酒のお礼は欠かせません。我が家では手作りのケーキとジュース(ときどきワイン)を用意します。あまりに多くの人サンタについて好きなことを書いているので、小学6年生の次女はサンタの著作権(?)を心配しています。最近、『だれも知らないサンタの秘密』から得た情報では、たくさんのかびと達がサンタの手伝いをしてい



ること。テレビで見るサンタのソリはあまり速くなくて心配でしたが、サンタはたくさんいて、長距離移動用のソリとプレゼントの補給基地があるおかげで、配達が可能になっているとのこと安心できました。サンタが太って見えるのは、特別なボディスーツのためとの情報もありました。サンタに関する情報交換や議論をしている次女の説明では、サンタが来る家と来ない家があり、我が家は煙突の代わりに天窓から入って来るようです。煙突も天窓もない友達の家には入って来られないために、お母さん達が代理をしているということです。サンタは家中の人が眠らないと来られないという情報も絵本から入手しました。そのため、クリスマスイブには夜遅くの仕事は禁止で、早く寝るように厳しく指示されています。今年のクリスマスもサンタはやってきてくれました。誰にも見つからないようにプレゼントを届けるサンタはとても苦労しているようです。

- ※「スーパーペンギン・ペギントン」高尾博子作／学研
- ※「さむがりやのサンタ」レイモンド・ブリッグズ作／すがわらひろくに訳／福音館書店
- ※「だれも知らないサンタの秘密」アラン・スノウ作／三辺律子訳／あすなろ書房

(技術教育講座)

## ■初めての雪が降る

藤田 博



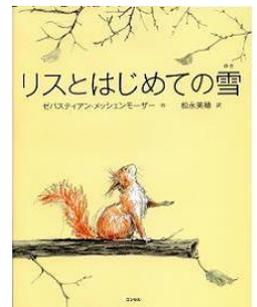
「初めての雪」の意味するものは、その年に初めて降る雪、新年に降る雪、そして初めて見る雪の三つ。「初めて」と「雪」とが一つになるとすれば、「初めて」が聖なる意味合いを持つもの、「雪」が天から降ってくる白いものだからと言えます。

バーネット・フォード文・セバスチャン・ブラウン絵・たなかまや訳『はじめてのゆきのひ』（評論社）は、「あっ、ゆき——さいしょは ゆっくり。」に始まります。「ぴくっ——こうさが めを さま」します。それから、「そうっ と あたかな すあなの そとへ でていく」のです。「はいいろおおかみ」がうろついていきます。「めんふくろう」が舞い降りてきます。「いまは じつと かくれていよう。はじめての つ

めたい ゆきの なか。」

子どもたちが飛び出してきました、「はじめての つめたい ゆきの なかへ。」こうさぎたちも走り出します、真っ白な野原を。「すきなだけ あしあとを のこして。・・・おもいきり あそぶ、はじめての つめたい ゆきの なか。」雪が遊びと結び合うのは、雪がつくり出す世界も遊びの世界も非日常的なものだから。すべてを覆い尽くす雪が横並びをつくり出す、子どもたちとこうさが、「はじめての つめたい ゆきの なか」横並びするのです。

セバスティアン・メッシェンモーザー作・松永美穂訳『リスとはじめての雪』（株式会社コンセル）が描き出すのは、リスとハリネズミとクマが見る「はじめての雪」です。冬がやって来る前に眠ってしまうリスは、聞いて知ってはいても、雪を見たことはありません。リスはハリネズミを誘います、「ふたりでいれば、おきているのもらくだし、目が4つあれば、はじめての雪も みのがすはずがない。」クマが言います、「雪がふらなければ ふゆにならないし、ふゆがこなければ、しずかにならない。」もっともらしいことを考えるクマが、わかっていないのは言うまでもありません。クマも雪を見たことがないからです。



雪とは、「白くて、しめっぽくて、つめたくて、やわらかい」、ヤギがそう教えてくれました。リスが持ってきたのは、歯ブラシ、ハリネズミが持ってきたのは、空きカン。この二人をクマは、「ちょっと おばかさん」と思います。雪は「やわらかいもの」でなければならぬからです。「これがはじめての雪だよ！」そう言ってクマが持ってきたのは靴下。リスを笑い、ハリネズミを笑うクマを笑うことはできません。クマも雪を見たことがないからです。その時、クマの鼻の上に……。雪は空から降ってくるもの、降ってくれば自ずと見上げることに。ここから最後まで言葉が消えている、そのことによって、「はじめての雪」を見た驚きの大きさと感激の深さがわかるのです。リスとハリネズミとクマは満足し切って眠ります。雪が降る中で眠る、その夢の中にも雪が降っているかもしれません。



菊田まりこ作『ゆきの日』（白泉社）の始まりは、「あさ、ゆきの けはいで 目がさめた」こと。「車も うごかない。電車も うごかない。しごとに おくれてしまう。さいあくだ！ ゆきの日なんか、さい・・・」と言いかけたその時、子どもの声が聞こえてきます。「ゆきの日って、さいこー!!」「ゆきが ふるのを 下からみていると おもしろいよ！」上を見るから「さいこー」の子どもたち。「足もとを 見て あるかなくっちゃ。」下を見るのは「さいあく」の大人たちなのです。

「きみ、ヒマなら てつだって くれんかのう？」おじいさんから声を掛けられます。雪で色々なものを作るのです。「・・・あれ？ なんだ？ いっしゅん、なにかを 思いだしたような・・・」思い出すとは、積み重なった下のものが出てくること。積み重なる雪が積み重なった時間を引き出します。「大人になる ということは、もう 子どもでは いられない ということ。」それでも、なくしてはならない、「わすれていたものが たくさんあるだけ」なのです。「すっかり おそくなってしまった」ことを感じさせず、忘れさせてしまう雪。「このおじいさん どうかしているよ！」と言った自分が、どうかしている自分へと返るのです。

※はじめてのゆきのひ／バーネット・フォード文／セバスチャン・ブラウン絵／たなかまや訳／評論社

※リスとはじめての雪／セバスティアン・メッシェンモーザー作／松永美穂訳／株式会社コンセル

※ゆきの日／菊田まりこ作／白泉社

(英語教育講座)

## ■絵本が教えてくれること

千葉 明香

「シーツ。」

「みんな、はじまるよ！」

元気いっぱいの子どもたちが集まった教室の空気が、静まる瞬間があります。

4月に子どもたちと出合ってから、朝の時間や学級活動の時間に、読み聞かせを取り入れてきました。最初は、「本のおもしろさを知って欲しい」「本好きな子どもを育てたい」という思いから、独自の判断で本を選んでいました。子どもの時に夢中になった本、好きな絵本作家の本、教科の学習と関わるような本。なかなか時間の取れない中でしたが、紹介も含めて50冊くらいの本と出合わせることができました。

読み聞かせをする中で、気付かされたことがいくつかあります。それらに共通するのは、「子どもにとって、本が教えてくれることは、無限にあるのだ」ということです。



夏休み前、佐々木マキさん、せなけいこさんの本を読み聞かせました。数冊ずつ紹介をし、「同じ人が絵も文もかいているんだよ」と話すと、「ほんとだ！ 絵が似ている！」「このおじさん、さっきの本に出てきたサーカスの団長と同じ人なんじゃない？」などなど、子どもたちの反応が大きかったことを覚えています。それから数日…。

「先生、図書室にせなけいこさんの本があったから借りてきたよ！」

「同じ題名だけど、絵がちょっと違う本(初期の作品でした)を見つけたよ！」

「お母さんが読みたいて言っているから、佐々木マキさんの本を借りていってもいいですか？」

様々な反応が見られました。生活科の学習で商店街に行ったときに、お店の看板を見て、「先生、あのお店、佐々木マキさんの『佐々木』っていう漢字が書いてある！」という発見を何人かの子どもが教えてくれたこともありました。

こんなこともありました。職員室で、「最近、給食の残量が多い。残さず食べるよう学級でも声掛けをして欲しい。」という話題が出たときのことで。給食を考えてくれている人、作ってくれている人の気持ちを考える機会はあまりありませんでした。そこで、直接話をするよりも…と思い、一冊の本を読み聞かせました。よしながこうたく『給食番長』です。ユニークな言葉遣いと独特の絵が、子どもたちを引きつけます。思わず笑ってしまうストーリーの展開の中に、給食を作ってくれる方々の思いや苦勞、感謝して最後までしっかり食べようというメッセージが読み取れます。子どもたちは、番長たちの言動や、給食のおばちゃんたちの表情に大笑いしながらも、すっかり魅せられてしまったようでした。それ以来、「給食番長」のキーワードが、「残さず感謝して食べるんだ」という子どもたちの意識を後押ししてくれるようになりました。



こんなこともありました。生活科でおもちゃ作りをしたときのことで。身近な材料を使ったおもちゃを作らせたいと考えていましたが、こちらから題材を与えるだけでなく、子どもが興味をもったものを作ることで意欲を高めさせたいと思いました。そこで紹介したのが、宮川ひろ『びゅんびゅんごまがまわったら』です。びゅんびゅんごままで遊んだ経験がほとんど無い子どもたちは、たちまち興味を示したようです。案の定、「作りたい！」という声が出て、次の時間にみんなでびゅんびゅんごま作りをして楽しみました。ところが、子どもたちに影響を与えたのは、こまだけではありませんでした。本の中に出てくる草花を使った作品にヒントを得たのか、裏庭で集めた秋の草花を使

って、すてきな飾りを作ってプレゼントしてくれる子も出てきました。

子どもたちの楽しみにしているクリスマスやお正月がやってきます。季節や行事に合った本をあれこれ選びながら、「さて、あの子たちはこの本からどんなメッセージを受け取るのかな」「どの場面、どの言葉に興味を示すのかな」と、私自身ワクワクしています。

※ピンクのぞうをしらないか／佐々木マキ作・絵／絵本館

※9ひきのうさぎ／せなけいこ作・絵／ポプラ社

※給食番長／よしながこうたく作・絵／長崎出版

※びゅんびゅんごまがまわったら／宮川ひろ作／林明子絵／童心社

(附属小学校教諭)

## ■眠れないとき眠る方法を教えてくれるこの一冊

ラッセル・ホーバン文／ガース・ウィリアムズ絵／まつおかきょうこ訳

『おやすみなさいフランス』(福音館書店)

川口 咲絵



7時、フランスの寝る時間です。ミルクを飲むと、おとうさんがおんぶして、部屋に連れていってくれます。おとうさんが、おかあさんが、おやすみなさいのキスをしてくれます。おとうさんは、おもちゃのくまを、おかあさんは、おにんぎょうを持たせてくれます。「おやすみなさい」を言います。でも、眠れません。目をつぶっても少しも眠くならないのです。フランスは、「あいうえおのうた」をつかって歌います。歌っているうちに、歌詞に出てくるとらが気になり始めます。「ここにもとらがいるんじゃないかしら？」今度は、「おおおとこ」がいるような気がしてきます。天井の壁のひびから何か出てくるような気がしてきます。カーテンを誰かが揺らしているような気がしてきます。自分のことをつかまえに来ているような気がしてきます。びくびくしながらも、ひとつひとつ確かめていきます。最後は、「おおおとこの、とらだの、こわいものや、むねがどきどきするようなものが いっぱいいて、くたびれちゃった。…あたしのしごとはねむること」と言って、「ぐっすりねむりました。」「おかあさんが、あさごはんですよと、よびにくるまで。」

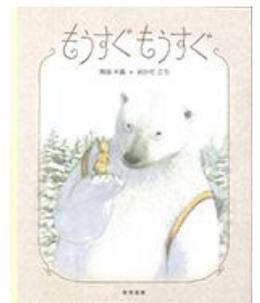
小さい頃、寝る前にいつも読んでもらう絵本がこれでした。他の絵本に比べて文章が多く、読むのに時間がかかるのを知っていたからです。眠れないときに限って、普段考えなかったことを考え始めてしまう、一つのことが終わるとまた別のことが気になってしまう、こうした経験は誰にでもあるのではないのでしょうか。夜遅くまで起きているのは、何か特別なことのように感じていました。それだけ、フランスのこの小さな冒険が可愛らしく、なつかしく思えます。どきどきして眠れない、その時にほっとした気持ちにさせてくれ、眠らせてくれる絵本なのです。

(英語コミュニケーションコース4年)

## ■ 新刊紹介

岡田千晶・おかだこう『もうすぐもうすぐ』(教育画劇)

うさぎのブブは四人兄弟、一番年下のブブは、「おにいちゃんたちがうらやましくてしかたがありません。」「はる」がどのようなものかを知っているからです。ブブは何度も聞きます、「はるがくるってどんななの？もうすぐっていつなの？」「はるがきたらね、ゆきがとけてはっばがしげってみどりになっていっばいになるの」、お母さんのその言葉からも、「はる」は待たれるものなのがよくわかります。待ち切れない初めての「はる」を思い描くブブの想像の輪は、それだけ広く、大きくなるのです。



「どーん、どーん」、遠くの方から音が聞こえてきます。「はる」が音を立ててやってくる、まさかと思えます。ブブは、「そーっととびらをあけてそとにでま」す。「とびらをあける」が、外なる世界へと踏み出すブブ、初めての「はる」と出会うブブの象徴となっているのです。「わあ…」、ブブの目の前にいたのは、見上げるほどに大きな白いくま。「はる」を運んできたくまは春の化身、正確には、「はる」の気配を感じたから動き出したということ。「おじさん、はるなの？」と聞くブブに、おじさんは、「にこにこわらいながらてをさしだしま」す。その手に飛び乗ると、ブブの体は高く、高く上がっていきます。「おひさまがかおをだしてはじけたようにひかりはじめ」たのが見えます。「うみのそばではゆきがとけてかおをだしたくさはらがみどりいろにかがやいています。」ブブはくまと握手をします。「しろくておおきなてはとてもあたたかでした。」ブブが聞きます、「またきてくれる？」くまが答えます、「もちろん、くるさ」

ブブが出会った「はる」は、大きなもの、高いもの、光るもの、あたたかなもの、そのすべてがくまと一つになっています。喜び勇んで家へと帰ったブブは、扉を開けます。「おかあさん！ぼくはるにあったよ」「はる」は、このときのくまとして、ブブの心に生涯残ることに、くまを「はる」と思いつづけることになるのです。

(藤田 博)

(発行：宮城教育大学附属図書館)